

郷土研通信



エゾヤマザクラ

発行：てしかが郷土研究会 (Teshikaga Regional Studies Association)
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10 (松橋方)

文章責任：松橋 秀和

アイヌ語：カルンパニ
グルグル充分に廻るの意
表皮を弓の補強に利用

近況報告

○総会開催

令和八年四月二二日ふるさと歴史館において、ふるさと歴史館副館長、学芸員の臨席があり、会員二一名中十四名、委任状三名で総会は成立しました。

令和七年度の事業報告並びに収支決算、監査報告がなされ、承認されました。

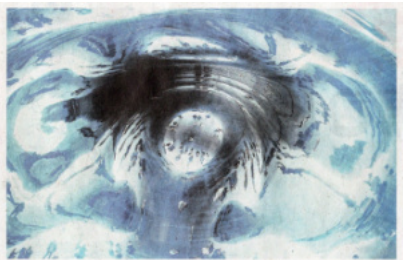
引き続き、令和八年度の事業計画(案)並びに収支予算(案)が審議され、承認されました。

令和七年度の事業概要は

山本正弘さん入賞

山本正裕さんの写真作品が第73回写真道展で二席北海道新聞社賞に入選されました。

入賞作品は道内を巡回する予定です。近間の展覧会場がわかりましたらお知らせします。



二席 北海道新聞社賞
ふしぎな世界
山本正裕＝釧路管内弟子屈町

北海道新聞から

・水越武写真展「知床 残された原始」を開催
二二日間開催し、延べ約五〇〇名の来館があった。

・勉強会↓一〇講座を開催

・会報の発行↓

№.二〇号から三一号を発行

・むかしむかし史写真館↓

№53～364号掲載

・町民文化祭に参加↓

「郷土研通信」のバックナンバーを掲示

・出前講座

川湯中学校↓「大鵬物語」

川湯小学校↓

「松浦武四郎とテシカガ」

1. 令和八年度の事業計画は
ホームページの

コンテンツの拡充

2. ふるさと歴史館補助業務

3. 「郷土研通信」

4. 「むかしむかし史写真館」の継続

4. 例会の勉強会で

会員の研究発表

5. 外部講師を招聘して

講演会の開催

6. 公民館事業の

「ふるさと講座」の支援

7. アナログデータの

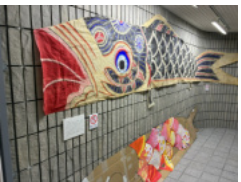
デジタル化

が提案されました。事業の詳細は例会等で説明し協議するようにします。

五月飾り

ふるさと歴史館の企画展です。

「鯉のぼり」は、明治の開拓医・長谷部徳美関係資料で、「兜飾り」の詳細は不明です
ロビーには、三匹の鯉のぼりが泳いでいます。



三館合同の企画展

ふるさと歴史館・大鵬記念館・アイヌ民族資料館の三館と屈斜路プリンスホテルが共同して「昭和を生きた英雄と町の記憶」企画展が開催されます。

期間 2026.4.25～6.30
ところ 屈斜路プリンスホテル
地下展示室

観覧料 無料



次回の例会

令和八年五月二十日(水)

一九〇〇

ふるさと歴史館

座談会テーマ

「更科源藏さんが

残してくれたもの」

話題先導者 斉藤敬子さん

客人話者

磯里博己さん

むかしむかし写真館

No.365

更科源藏著「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『父母の原野』の段―その4

松橋 秀和

丸米旅館の記述が
なかったわけは？

『弟子屈町史』（昭和24年刊・更科源藏編）には、

「本山七右衛門氏が（略）明治十六年に（略）温泉宿をつくったが、明治十八年についに一家をあげて居を移した。（略）その翌年（明治19年筆者註）には福山ウメさんによって旅館が建設され、後間もなく土沼寅吉氏（土沼助吉氏の先代筆者註）が引受けた」



土沼寅吉
『明治人土沼助吉小傳』から

とある。

更科は、『明治人 土沼助吉小傳』（更科源藏著・昭和44年刊）に「筆者は且て『弟子屈町

史』の中で：（前述のとおり）と書いた」という。続けて

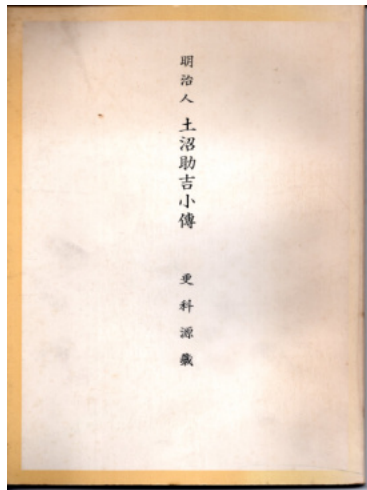
「この福山ウメは野付牛屯田（北見市筆者註）の出であるといわれたが、野付牛屯田の入植は明治三十年と三十二年であるので、年代のくいちがいがあがるが、その後判明したことは、福山は野付牛屯田の入地の頃、屯田将校集会所の炊事掛をしていて、三十二年に弟子屈に来て、平屋建の旅館を二階に改築。（略）あるいは福山ウメが最初に金主を得て旅

館を経営し、二十九年に釧路鉄道が廃止になって、宿の方が暇になったので、野付牛屯田の入植をあて込んで、出稼ぎに出たということも想像される」と書いてある。

『父母の原野』では、主人公四郎の父たちが入植した明治二十三年頃の市街地の記述に「そこに三軒の和人家（本山旅館、駅通、柳沼商店筆者註）があった」とあるが、丸米旅館の平屋建ての建物はないが、実態は営業をしていないも同然であったのではなかったか、と想像ができる。

では、明治十九年に平屋の旅館を建てたのは誰だということになる。

『明治人 土沼助吉小傳』で更科は



『明治人 土沼助吉小傳』
更科源藏著・昭和44年刊

「福山の創設した丸米旅館も、その出資は標茶で大きな料亭を営んでいる、大平という者であったともいわれている。



明治33年の丸米旅館
『明治人土沼助吉小傳』から

測すると、福山ウメが野付牛屯田の出稼ぎから帰ってきた明治三十二年ころではないかと考えられる。

助吉は、明治四十四年に土沼寅吉の養子に迎えられ、温泉宿を経営している。

『弟子屈町史』の修正は？

このことは、更科が『弟子屈町史』編さん中は不明であったが、後に分かったことである。その後刊行された『弟子屈町史』（昭和五十六年刊）では、更科が編さん

その大平と福山との間がまぎくなくて、借金のかたに丸米旅館が大平の手に渡り、大平も自身で経営に当たるわけに行かないので、土沼寅吉に経営をゆずった：。（略）

譲渡の条件に

「ウメの生涯の面倒をみる：（略）ウメの墓が土沼家の隣に一緒に並んでいる」と記述している。

『明治人 土沼助吉小傳』に、土沼寅吉が経営を引き受けた年代の記述はないが、更科の記述したことから推

あげなければ、更科の意をくむこともできず、また、この先そのまま後世に伝えられていくことになる。「そんな仔細なことは、どうでも良いんでないの」ということではないと思うのだが。

（つづく）